

いわゆる「普通」な魔法使い

朱莉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

魔法の森に住む、職業：魔法使い、種族は人間。

周囲からは白黒だの、泥棒猫だの鼠だの色々呼ばれてるけど今日から「普通」に生活しよう。

※このお話は深刻な性格改変に近い現象があります（と言うよりそれメインです）

※ネタとして投稿したので、もし続いても不定期です。ご了承願います。

※アンチ・ヘイトを今更追加。そんなつもりはないけれど一応。

※描写など読みにくい場面が多々あります。ご理解下さい。



目次

その壺！	「普通」が一番！	1
その弐！	真実は時に残酷だと思うの！	6
その参！	突撃晩御飯！	10
その肆！	ハミングってボイトレ効果があるんだよ？	14
その伍！	夫婦喧嘩は犬も食わない？	18
その陸！	食欲の秋とか絶対に敵だと思う！	22
その漆！	月が綺麗ですね	25
その捌！	虹は太陽の反対にしかでない！	31
その玖！	私に勇気を分けてくれ！	33
その拾！	死して屍残すまじ！	35
その拾壺！	取捨択一取捨選択四捨五入！	38
その拾弐！	意思の疎通は用法用量適切に！	40
その拾参！	シリアスっぽいけどシリアル	42
誰かの日記		45
その拾肆！	皆で渡れば恐くない！	48

その壺！ 「普通」が一番！

前世の記憶……というのをどう思う？

私としては最初は有り得ない、まやかしだ みたいに思っていた。そう、思っていたのだ。

いつも通りに生活していたつもりだった。変なキノコを食べたとか、誰かに訳のわからない魔法や妖術を使われたわけでもない。ただ普通に生活していたつもりだった。

朝起きて、知り合いの本を借りて、神社に遊びに行つて、それで寝た。

それなのに朝起きたら私以外の別の記憶が私の中に居た。

二重人格とかそういうわけではない。勝手に体が動くとか、気付いたら別の場所にいるとか、夢遊病とかの気配もない。

ただ全く覚えのない記憶が頭の中に居る。それだけである。

そりゃ、最初はびっくりしたよ？ でもそれも最初だけ。

今じゃ別に問題なく過ごせる。でもまわりからは不気味らしい。なんですか。

それからというもの「普通」に過ごしてきた。

でもそれはその記憶にとつての「普通」で、

私のとつての「普通」とは別になつてしまったんだけど。

昔の私からしたら変なんだろうな……。

▽

とりあえず最初にやったことは、今ある借りてきた本を返したことかな。

流石にメモ……というか書きし終わったやつだけだね。

いつもだつたら侵入して、無理やり奪つてきた本だけど、「普通」を知った私はそんなことできない。

「普通」に門から入つて、

「普通」にメイドと挨拶して、

「普通」に話して借りてきた。

死ぬまで借りるとかそんなことしないもん。泥棒ダメ、絶対！

無理やりでなければパチュリーも問題ないって言うのにな。争いごとのない「普通」ばんざーい。

隣人である魔法使いのアリスこと、アリス・マーガトロイドから借りたものも勿論返しました。

最初は訝しげに怪しまれたけど借りたまま返したので特に問題はなかった。

返した時に「これからは普通に過ごす」って言ったんだけど、今も警戒されてる。

まあ、しょうがないね。

人付き合いも大事だから知り合いの神社（寂れた方）にお賽銭を入れた。

その神社の巫女である霊夢こと博麗 霊夢からは熱でもあるの？と心配された。

「これから普通に過ごすんだ」と伝えたら手をおでこに当てて「熱はないわね」とまで言われた。世知辛いなあ。

勿論もうひとつの神社（神が二柱もあるほう）にもお賽銭を入れた。緑の2Pカラーこと東風谷 早苗に組み付かれるほど心配された。

「普通に過ごす」と伝えたら「あの魔理沙さんが？ 有り得ない！」とまで言われた。そろそろ堪えてくる。というか堪えたのでそろそろ帰ろう。

一日でいろいろ回ったけど空を飛べるって楽だなあ。

え？ 普通に過ごすんじゃないかったって？ 普通の魔法使いだからいいんだもん。

▽

今日の御飯は美味しくできたからアリスと一緒に食べた。

キノコが入ってるからまた訝しげだったけどちゃんと食用です。魔法のキノコで料理はしたくない。あれは魔法の媒体にするものだ

し。

食後に予定はなくて暇だったのでアリスと一緒に人形を作った。アリスは邪魔しなければ問題ないらしく色々教えてもらいながら作った。

目がボタンの簡単な人形しか作れなかったけど、楽しかったから都合をつけてまた挑戦しよう。次挑戦するついでにこの子の服も作りたいな。

夜遅くまでお邪魔するわけにはいかなかったので、折を見て帰宅した。

家に帰ったら魔法の研究。派手な魔法は私の専売特許(?)だけとお淑やかでお洒落な魔法も学ぶ上では大切。「普通」に借りた本でお勉強。

わからなかったところは今度パチュリーに教えてもらおう。

詰めすぎてもダメなので、キリのいいところでやめて就寝する。

明日も「普通」に過ごそう。

ああ、「普通」っていいなあ。



最近になって魔理沙が可笑しくなった。

何が可笑しいとか、そんなの気づかない方が絶対に可笑しいって言えるくらい可笑しいのだ。

曰く「普通に過ごす」とか、

曰く「借りたものは早く返す」とか、

曰く「人付き合いは大事」とか……。

悪霊の類いなら私だったらすぐ気付くはずなんだけどなあ。

悪霊がとり憑いたと思えるくらいに違和感しか感じない。魔理沙には悪いけど。

これが起きる前動作とか一切なかったし……飽きれば元に戻るかしら？

まあ、普段のあいつを知らなきやこのままでもいいんだらうけど……。
アリスが言うには食事に誘ってくれたらしい。しかも普通のキノコ料理だ。

魔理沙が普通のキノコ料理を作るとかとか絶対ありえない。私の神社に参拝客が来るくらい……って何言ってるのよ私！ というか……あー、魔理沙が参拝したときのこと思い出しちゃった。普段から私のところに来るのは変わらないけどそれはお茶をするためにだし、なんなのよつもー！

気が向いたら紫にでも聞いてみようかしら……私の勘が一切働かないとか、どうということなのよ……。



近隣に住まう「普通」の魔法使いが最近になって妙なことになった。最近……とはいえ今日からだ。

普段なら思想の違いで些細ないざこざが多発する私たちだが、今回に於いては私の失態が引き起こした問題に対して先にあちらが謝り、その上「死ぬまで借りる」と言って盗っていった本を返してきたのである。

受け取ってすぐに自身の魔法で差異がないか調べた私は悪くないと思う。警戒したが特に問題はなかった。

それと食事を一緒に摂ったのも初めてだったか。
彼女は魔法や私生活に於いて、魔法の森で取れるキノコを頻繁に使う傾向にある。

霊夢が言うにはそのキノコを食事にも使っていると聞いていたの
で、食事に誘われ警戒したが入っていたのは一般の人が食べる食用キノコ。

扱いには長けていたのか、至るところで使用されていたキノコにも嫌悪せず美味しく頂けた。もしかしたら私が作る料理よりも格段に上かも知れない。それくらいだった。

食事のあとは一緒に人形も作った。

先ほどの料理で気を良くしていた私が（決して物に釣られた訳ではない）詰まるたびに教えて彼女は初めてにしては「普通」に出来ていた。

魔法で操る訳でも無く、糸で吊る訳でもない、ただの人形だが彼女は笑みを綻ばせながらも一生懸命作っていた。

人形が出来るところには日もだいぶ暮れていたので彼女は足早に帰り支度を整えて帰っていった。次の人形作りの約束もして。

以前から彼女を知る人は違和感しか感じないだろうが、私としては今の彼女も尊重したいところ。

彼女が「普通」を目指すなら、私としてはそれを手伝っていこう。

その式！ 真実は時に残酷だと思いの！

妖怪も人と変わらず。

それは多分ここじゃ「普通」だと思う。

流石に寿命とか根本的なことは違うけどさ、この言葉が言いたいの
は妖怪も人も終わりがあるって事な訳よ。(私談)

で、その言葉を今回は別の意味で使わせてもらうけど、慣れって恐
ろしいよね。

最初は訝しげにしてたアリスが人形作りの一件(以外にもありそう
だけど)から「普通」に接してくれるようになった。

というか、変わりすぎてびっくりするほどである。え？ 私が言う
な？ ごもつともで。

まあ、あれから何度も接触したからだと思っただけだね。人付き合
いは継続させる 事！ 「普通」だよ。

人形作りも少しだけ楽になった。勿論服作りも含めて。

アリスのように操るとかは無理だけど、なんていうのかな……裁縫
が上手になったから私生活にも応用できそうだ。今ではソーイング
セットを持ち歩いているほどである。簡単な物しか入れてないけど
ね。

あと上海人形アリスの人形から気に入られた？

人形制作中のことだけど、よく私のかぶってる帽子の上に乗っかっ
て遊ぶようになった。と言うより、これがもしアリスの嫌がらせだと
したら精神的に堪えるので気に入られたってことにしよう。やった
ねまりさ！ 友達がふえるよ！

魔法の研究も捗ってるよう。

某配管工みたく巨大化とか頭数アップとか流石に無理だけど。(擬
似魔法なら行けるかもだけど)

煌くキノコがあるんだけどそれを使って簡易照明を作ったり、

破裂するキノコで花火（点火必要なし）を作ったり、研究というか、発明の領域だね……コレ。楽しくて時間がすぎるのが早い早い。

研究だと専ら^{もっぱら}ポーション制作かな。

できたポーションから改良点をひとつでも作る、

それを改良してまた改良点を見つける、

それをまた改良して……って作っていった。

これまた時間の経過が早いなの。

最初にできたポーションなんてキノコ臭くて飲めなかった。

次に出来たのは色が不気味なもの、飲む気すら起きなかった。（研究のために飲んだけど）

色と匂いが決まったら次は効力。材料の割に効果が薄かったらダメ、高すぎても中毒になるからダメ。（それはそれで使えるからメモを残しておいた）

薄すぎず濃すぎず……その配分が辛かった。

そして苦労の末に完成形ができた！

恋色の甘酸っぱい完成形。効力は滲む様な熱さ。

……作り終えてから我に返って顔を真っ赤にして暴れまわったのは記憶に新しい。

「普通」に恋してみたいんだもん。しょうがないじゃんか。でも王子様とかそういう願望じゃないからね？ ……本当だからね？

今度アリスとかパチュリーにあげよう。魔法使いからの感想が欲しい。それにあの二人なら笑ったりもしないはず。先輩って大事。

巫女たちは論外である。慈悲もない。

でも妖怪に効果あるのか聞きたいから慧音辺りに譲ろう。妹紅でもいいな。

でも効果考えるとフランに譲るのが一番かな。その為にはレミリア

ア辺りに実験台になってもらわねば。（ゲス顔）

真っ先に危険じゃないか調べるために永琳に渡すのもいいかも

……。

そうと決まれば最初にやることは量産だな。作り置きしてみても保
存がきくとかも調べたい。うーむ……やることが多いなあ。

咲夜にでも頼んで時間に関する術……いやパチュリーに聞くのが
妥当かなあ……。

無理にしる擬似的に早く行動するとか……あ、そうか。それなら風
で応用して……メモしなきゃ！ 楽するために苦勞する、本当にその
通りだわ。

結局何を最初にまわすかって？ 結果が出ている調査を先にまわ
したともさ。

▽

いや……もう、本当に疲れたよ。

え？ 何につて？ まあその疑問もその通りだけどさ。

研究結果として残ってるって言っても効率とか純度とか、それらの
計算を忘れていたっていうね。我ながら抜けてるよ……ぐすん。で
も成果は出たよ。

というか効果に一切触れてないね。黒歴史に等しいこのポーション。
ン。

名前はますぽ。私が作ったから「ま」、おもむろ徐に脳内に浮かんだマス
ターの「す」、そしてポジションの「ぽ」だ！ いや安直すぎてもいい
じゃない。悩むとトラウマにしかならなさそうだから即決が一番だ
よ、うん。(時と場合によってそれ自体も危険だけど)

効果は心を落ち着かせるだけ。至ってシンプル。

人によって使い方が違うと思うけどね。個人的には暖かくなるか
ら睡眠助加薬として使えそう。眠れない夜のお供に！ 魔理沙製薬。
……いかん、なんか危険な香りしかない。

とりあえずアリスとパチュリーと永琳に渡そう。それで危険性や
問題点を聞いて、大丈夫そうなら他の人に渡そう。

……あ、今更ながらに重要な事を思い出してしまった。
私風呂入ったのいつよ？

その参！ 突撃晩御飯！

時間的に昼時なんだけどもね。

お世辞にも参拝客が参るとは思えない少し寂れた神社を、定番である紅白普通じやないの巫女服を着た女性が手馴れた様子で箒片手に掃除していた。

そう、私の友人である博麗 霊夢である。

そして私こと私の名前は霧雨 魔理沙である。あ、みなさま、おはこんばんちは。

流石にお風呂入りましたよ気付いてすぐに。キノコ慣れって怖いわあ……じめってるから自分の変化に気づかないとか怖いわあ。

私の服はいつも通りの白黒模様。汚れたりしても気楽なのがいいところだよねえ。

で、今日は何しに来たかと言えばおすそ分け。薬品じやないよ？

ご飯のだよ？ まずぼはまだ検証中だからね。できてても渡さないけど。

確か霊夢は好き嫌いなかったはずだから適当に作ってきた。あ、きのこ分は大量なんだけどね。だってそうしたほうが安く済むし、何より作りやすいんだもん、しようがないね。

で、おすそ分けを運びながら移動してるわけですが、やつぱ空を飛べるのは楽でいいわあ。鳥と違って羽で飛んでるわけじゃないし、某魔女宅よろしく運び中なわけです。いやあ歩くのと違って煮崩荷崩れれとか心配しなくていいのは大きいなあ。

という訳で到着。

「やあ、掃除頑張ってるねえ」

「なんか用？」

なんでこの巫女は不機嫌なのだろう？

「お昼の差し入れ。食べてなかったらだけど……台所借りてもいい？」

「……いいわよ。さっさと終わらせるから先にあがつといて」

「ありがとう」と軽く告げて私は箒を縁側に立て掛けてそそくさとお邪魔する。

自分の履物はちゃんと整えて隅っこに寄せてから台所に向かった。



縁側から馴れたように台所に向かう友人を傍目に一瞥し軽く溜息を吐く。

やっぱり私は魔理沙には悪いけど昔のように接することはできない。

表に出そうと思ってなくても辛くあたってしまう。私自身はそんなつもりはないんだけども。

アリスは害はないから構わないと言っていたけど……あの魔理沙が断りを入れてお邪魔するだけに飽き足らず、言われずとも自分の履物を整えるなんて……。

百歩譲って差し入れには感謝しよう。貰えるのであれば私に不利益じゃなければ貰うのが私の信条だから。(アリスが言うには美味しいらしいし)

でもやっぱりあの魔理沙がここまで変化したのを見ると……しかも何も私には相談してくれないし、アリスやパチュリーのところにはよく行ってるらしいけど……紫に相談してみても、いい返事はもらえなかったし……自分でやるしかないのかしら。

掃除を終えて後片付けを済ませ魔理沙の後を追う。私が縁側に着いた頃には空きっ腹に利く良い香りが鼻をくすぐる。手際の良さからある程度仕上げてから来たのだろうか？ 香りからしてキノコ料理か。アリスから事前に聞いていなかったら台所に殴り込んでいただろうが……とりあえず居間で待機しておこうか。

「霊夢う、もうすぐ完成するから楽にして待っててー」

足音が聞こえたのだろうか？ 居間に向かおうとしている私にその声を投げかけた。軽く返事を返して居間に行くと湯呑が置かれていた。中身を見れば今しがた淹れられたのであろうか、湯気がたつて

いた。

気が利きすぎて渴いた笑いしか出ないのはしょうがないと思う。しかも見覚えのない茶請けもあるし……。

魔理沙が来たのは丁度茶請けを食べ終えた頃だった。え、なに、見計らったのつてくらい丁度に来たから数秒止まってしまった。

そんな私を見て魔理沙はゆっくり休んでいいぞと声をかけ、せつせと準備を始めた。こいつは私のお母さんだろうかってくらいだ。

……果たして出てくる料理を素直に食べていいのだろうか？ 毒とか入ってるのではないか？ 考えるだけ無駄か……なるようになる、だ。

▽

借りてきた猫っていうのはあんなのを言うのだろうか？ 台所を借りているのは私なわけでいろいろと食い違っではいるけども。要は霊夢は今の私に不満を抱いている、それも割と顔に出るくらいに、つまりは凹むってことさ。はあ。

以前の私が台所を借りたことがあるのか、ただ知っていただけか、よくわからないけど器具のしまっている場所がすぐわかって良かった。流石に掃除しているところお邪魔しているから呼ぶわけにはいかない。料理で焼けぼっくいに火がつくといんだけど……物で釣るのはやっぱりダメかなあ。

無理だったら話の種にしてそれで……かな。

さて、気になるご飯の中身は空★鍋……ではなく普通に作り置きと
いうか寝かしたカレーなわけで、加熱とちよつとの味付け＋白米で完成なわけよ。白米はちゃんと持ってきた。人ん家襲撃しといてご飯頂くとかどんな畜生よ……私ですね、猛省します。

お茶のお代わりも準備して霊夢が元の調子に戻ってからさして頂きますつと。手を合わせて行儀よく、訝しげに見てくる霊夢に見せつけるように口にほうばってやったのだわさ。え、口調が変？ それくらいしなきや霊夢の目線光線に胃がやられそうな勢いなんですわ、マジで。

そんな私の頑張りが実ったのか諦めただけなのか定かじやないけど食べてくれましたよ、この巫女さん。いや食べてくれていいんですけども。

「……」

「なによ？」

「お、お味は？」

「……美味しいわよ。食事中に喋らすんじゃないの！」

「ぐもつともー！」

えへへ……つといけない。割と素直に喜んじやった。でもやつぱ言われると嬉しいいわけで……えへ。

まあ、その食事中は不敵な笑みを浮かべる私と、そんな私を可哀想な目で見える霊夢という絵面が終わるまで続いたとさ。

その肆！ ハミングってボイトレ効果があるんだよ？

ハミングっていうのは鼻歌とかそんな感じ。用法とか守つたらの話ね。

人間って煮詰まるとどうも先に進まなくなるよね。勉強に然り、研究に然り、創作に然りね。

だから今日は遊びに行ってる。といっても根本的には違くてやることは身近なところから研究へ……という名目。どうせ友達の家に勉強しに行ったはずが遊んで帰ってくるフラグだよこれ。どう転ぼうが方便って大事。次の行には遊びのことしか考えてないけど。

で、どこに遊びに行くかといえば紅魔館近くの湖だ。目当ての妖精がいなけりゃ釣りにでも勤しむつもりだ。のんびり座^霧って釣るのも結構いいものだよ。釣れたためしないけど。でもほら^田ふいん^気き(なぜか変換できない)を楽しむって感じで。

で、釣竿装備して鼻歌一つ歌いながらまず先に行ったのは紅魔館。何しに行ったのかって？ そりゃ喧嘩売られたくないから使用の許可……というか喧嘩売られないように言付けしに行くんだよ。あそこの連中案外血気盛んだし。

まあ弾幕勝負なら相手になるつもりではあるけど……新しくスペ力作ったから試したいし。正直魅せるほどいい出来ではないから表立って使うつもりあんまりないんだけど。

パチュリーに会いに行く過程で美鈴とも仲良くなったんだけど弾幕勝負の練習相手が欲しいとかいろいろボヤいてたから、機会があればじゃんじゃん誘う予定。予定は未定で決定ではないんだけどその予定。

ということだ

「ちわー」

「おや、魔理沙さん。釣竿装備でどうかしたんですか？」

私の挨拶に和やかに返してくれたのは門番こと紅 美鈴。個人的に付き合いたい性格ナンバーワンだ。付き合うって友達としてだよ？ 他意はない。

「そりや竿があるなら釣りだよ。その湖でやるつもりだから借りるよってこと」

「なるほど。許可を……ということですね。ならば問題ありませんよ。一応あの湖は私物ではありませんしね」

「そつか。でも問題がないように確認したかったんだよ。門番頑張れよ美鈴」

「ははっ。魔理沙さんも釣り頑張つて下さい」

竿を持った手とは別のバケツを持った方で美鈴に手を振る。そんな私に美鈴は小さく手を振り返してくれた。

個人的に些細なことでも返事があるのは嬉しいものだ。霊夢にも見習って欲しい……と思うが霊夢が血気盛んなのは私のせいにも等しいし……んー、もどかしい。

仲直りっぽいのはできたけど未だにトゲが抜けないんだよなあ。

▽

そんなことより
閑話休題、今は釣りを楽しもう。

妖精はいなかったからね、探すのが面倒で釣りに逃げたわけじゃない、決して。誓いはしないけども。

釣れた魚はパチュリーか妖精に……いや自分で識別魔法……はダメだな失敗したら危険だからやっぱ聞こう、食用なら今夜の食事が豪華になるぞう。やっぱい今から楽しみになってきた。後ろ向きな考えだけど食用が釣れなかったらいつも通りのキノコ料理だ。

釣り餌は疑似餌ルアーでやるつもり。虫でやってもいいかなって思ったけどそんなに得意じゃないんだ、私。それと食べるかもしれないのに虫は使いたくないって思うのは私だけだろうか？ いや捌くときに臍物は抜くからそんなに気になるものでもないのはわかってるんだけども。

湖に着いた私は適当な石の上に腰掛けた。案外座り心地がよくて

長時間いても困らなさそうだ。動かずにぼーっとして釣るつもりだからケープを羽織る。水辺は温度変化とか激しいからね。魔法で防水対策はバッチリ！ 防寒魔法は完璧に覚えてないから本当に寒くなったらまずぼを使う予定。まあ余裕があれば、ね？

言っちゃいけないだろうけど備えあれば憂いなしとか言うが、備えても勿体なくて使えない……貧乏性だからだろうか。我慢できなくなったら使おうと一応計画してるつもりだ。結局使わないとか野暮なこと思っちゃいけません。

水影が見えるほど湖は澄んでいた。浮きを魔法光でカバー（魔法使いだけにしか見えない）していたけど重装備過ぎたかな？

ここまで澄んでいると気分も晴れそうだ。汚い水で釣るよりも綺麗な水で釣ったほうが気分がいい。あとあと出来たら食べるつもりだから身体的にも衛生的にも精神的にも健康なはず。

鼻歌を鳴らしながら上機嫌で竿を振る。こんなのは感覚だ、遠くに飛ばすようにイメージして疑似餌を飛ばす。勿論後方確認はしっかりと。安全第一！

ぽちゃん という心地よい音を響かせて疑似餌が沈む。竿を適当に固定して軽い振動を与え続ける。浮きの行動を阻害しない程度に動かし疑似餌を生きっていると錯覚させうんぬんかんぬん。てきとーにするのが私のスタンス。でも全力で。

遊ぶのにも全力でどうでもいい方向に全知識を使いながら本気でやるのが面白いと思うんだ。

……こういうぼーっとした時に読書とかするといいなあ。

▽

何度も同じ行動をすれば人間は覚えるもんだ。洗練されていくといってもいい。

案外疑似餌効果はいいらしくポンポンつれた。案外経験なくてもいけるもんだね、病みつきになっちゃいそうだ。もう弾幕勝負はいいや、今日は釣りだけをやる絶対。

私が見てわかった魚はアユとかブナとかマスかな？ 途中、悪乗りでカエルを釣り餌にしたら河豚ふぐと提灯鮫鱈ちようちんあんこうが混ざったような魚が引つかかったけど餌ごと持ってかれた……多分あれがヌシってやつなんだろう多分、多分としか言えようがないのだ。というかその魚が陸を歩いていた気がしたけどきつと気のせいだよ。あー、あー、わたしはなにも知らないー、わかりたくないー。

釣れた魚は四匹、すぐ食べなくても何匹か飼うつもりなのでもう少し粘ろう。

え？ あの魚を飼うのかって？ アノ魚？ ナニソレシラナイヨ？

金魚鉢で飼える程度のやつ釣れるまで粘ろう。ちっこくて可愛いのがいい、この際ブサかわでもいいからちっこいの狙うんだー！

餌を疑似餌から団子状の練り餌に変えて竿を振る。練り餌のサイズは指爪くらいだ。竿も振る必要はないので浮きが動くのをじっくりと待つ。

あー……この何もない時間が幸せだあ。

その伍！ 夫婦喧嘩は犬も食わない？

流石に我慢の限界だ。いや我慢というよりも待っていたといったほうが正しいのだろうか。

今の魔理沙に期待するのもどうかなくて思う。紫が言ったことなんて私にとつて些細なことだったってだけ、もう辛抱堪らない。何があつたのか逐一問い詰めてやる。

話したくないなんて言われても絶対に折れてやるもんか、今の魔理沙が知らなくなつて前回の魔理沙なら今の私の怒りをわかってくれはす。

普通になつてくれと思つたことは何度もあつた。もつとマシになつてくれとも。

でもそれは無理なことをわかっているから皮肉の意味も込めて言つたものだった。まさか本当にそうなるなんて昔の自分を殴つてやりたいと思うということはこういうことなんだろうか？ まあ、意味が違うんでしようけどね。

思うが早いかな神社での仕事をさつくり（どうせ来る奴なんて居ないし）終わらせ、今脳裏に思い浮かんだ言にがくりと膝をつくが今はそんなことをしている暇はない。

いや暇はあるけど……あーもうこうなつたのも魔理沙のせいだ、全部あいつが悪い。

あいつが「普通」とか言い出してからなのだ。

私がこんな苦労を覚えるようになったのや、

私が珍しく紫にものを頼んだり、

いつも以上に気遣つたり、

この神社に参拝客が来ないのも、

全部あいつが悪い。私が決めた今決めた。そう思つたらイラついてきた、殴り込みならぬ弾幕の押し売りだ、あいつに拒否権はない。問答無用でボコる。

……とりあえず午後になってから押しかけよう。

▽

今日は特に予定もないし散歩よろしく箒で空中遊泳……でいいのかな？ をしているところ。風を浴びながらよそ見をしても誰にも文句を言われないし、最高だよね。

じゃあ今日は何から話そうか……ああ、まずぽに関してパチュリーが興味持ってくれて、アリスとは一緒に作った時に気に入った。魔法使いが手伝ってくれるととても楽になることがわかったんだよ、材料とか制作時間とかいろいろ節制してくれて尚且つ教授してもらえる。いやあ嬉しいことこの上ないね。大量生産（するの？）したって安全性は万全、用法用量守って厳守絶対にを確保。

で、ずっと研究つてわけじゃないから空いた時間は何してると思う？ パチュリーの方に行ってる時はヴワルでヴワっちゃう（ただ読書してるだけ）無理矢理借りなければ基本自由らしい。だが紅魔館に遊びに行くとは八割高の確率でフランが子泣き爺よろしく乗っかってくるわけだが。

アリスと居るときは人形作成とかお菓子作成とか、それが終わればのんびり紅茶タイムなんだけどもね。最近じゃ上海人形が頭に乗っかってくるようになった。人形なので軽いし嬉しいから何も言わなかったけど気付けば装備ありきで乗ってくるから地味に肩が凝る。

二人という時はそんな感じかな？ 霊夢とはあのご飯以来刺々しい空気が緩和されだいぶ楽になったかなあ。私の性格が急激に変化したせいで距離感が掴みにくいみたい。「面倒をかけるねえ……」ってしみじみ言ったら「誰のせいよ」って怒られた。その通り過ぎて涙目ですわ。

そういえばこの前、妖怪の賢者こと八雲 紫さんに出会ったわけですよ、さんなんて付けて呼ばないけどね。「霊夢をあまり心配させないで」って物凄くお母さんみたいな台詞をかまされたんで「わかったよお母さん」って言い返したら扇子で叩かれた。笑いながらやってた

んで冗談だってわかっていると。さり際に「また会いましょうね」って言ってたから近いうちに会う気がする。

で気分もよろしくお腹が空いたんでるん気分です。帰ったんですよ、そしたら帰り際……というかも家の屋根が見える寸前？ すんげー見覚えのある結界が見えたわけですよ。家がすっぽり埋まるくらい縦長で、巫女が使いそうな結界っていうの？

思わず素面になってしまったよ……。え、何、私なんかした？ 覚えありすぎるけど家ぶっぱされるほどまで酷いことしてないと思うんだけど。

畏怖する気持ち押し殺しつつ現行犯のうちに話しかけてみれば、用があつてやってきたけど家にいなかったからムカついてやった。だってよ？ ですっきりした顔で問答無用のスペカも申し込まれた、え、何この子一体どうしたの？ 今日の霊夢おかしくない？ もう霊夢自身が異変状態なんだけど、え？ あ、平常運転ですか、そうですか。

押しかけ女房にしちや物騒すぎるっしょ？ とか思ってたけど今の霊夢に言ったら火に油を注ぐだけなんで好きなようにさせよう、そうしよう。

その弾幕勝負は肉弾戦が多かったのは何故だろうね。とりあえずグレイズそこそこ被弾は抑えてみた。なお、長くは持たなかった模様。

前略、隙間の奥のお母さん^紫、霊夢よりも私を心配してください。切実に。

後半もう弾幕勝負とか関係なく暴れまわってる霊夢にパワーボムをかけられた私は儂くも、海のもずくよろしく打ちひしがれております。

「ふーっ、すっきりしたあ」

「……（満身創痍）」

そもそものお話で弾幕ごっこ云々の伝達者でもあるような巫女様が、弾幕なんてしゃらくせえ精神で肉弾戦するとかどうということなの

よ。スペルカード宣言もなしにボンボン使ってくるし。弾幕は綺麗だったから限りなくアウトに近いセウトなんだろうけども。

満足顔の霊夢さんはそのまま神社に戻って行きましたとさ。

首を片手で抑えゆつくりとまわす。私が丈夫だったからか、霊夢が寸でのところで威力を殺していたのかよくわからないけど、軽く打ち身をした程度のようなだ。

そして起き上がり深く息を吐く。

それはもう深呼吸のごとく吸い込んだ息を溜め、肺の中が空っぽになるくらい深くだ。

だつてさ、家、消し飛んだじゃん。

研究した内容は全部とは言えないけど覚えてるよ？ でもさあ

……私今日からどこで寝泊まりすればいいのよ。

……家がなければ家を建てる魔法を作ればいい。と前向きに考えようか。

で結局霊夢の言う『用』ってなんだつたんだろうね。

▽

あ、問い詰めるの忘れてた。
まあいつか。

その陸！ 食欲の秋とか絶対に敵だと思う！

何がってそりゃ女の子にとって食べるってのはつまり……って言わせんなバカ野郎。

家を吹っ飛ばされて泊まるところなんて考えてない訳で（そもそも吹っ飛ばされるなんて思うわけ無い訳で）怒っている霊夢に会うのも気が引けて、結局頼ったのはアリスだった。アリスに理由を言ってみれば苦笑したあとに「ちゃんと謝りなさいよ？」って言われた。そう言われても「謝るって何を!？」って返しても自分で考えろだってさ。素直にわからないから教えてってへりくだった方が良いのだろうか……。

とりあえずぶっ飛ばされて初日に寢床は確保できたからそれからという毎日を建築作業で過ごした。萃香に頼めたら楽だったんだろうけど原因は多分私なので甘えないようにする。魔法でやろうと思っただけでこういうのは時間をかけて自分の手でじっくりとやったほうが愛着がわくと思う。

ぶっ飛ばされて悪いことだらけだった気がするんだけど良い事も多少あった。というか多少なりともあった事に驚いているといったほうが正しいか。

借りたものも丁度返却し終えていたし、メモした物もいつも持ち運んでいたし、以前釣った魚も大きくなりすぎたから湖に帰した後だったし、アリスと作った人形も帽子の中に居たりする。ぶっ飛ばされた家にあつたものと言えば作り慣れたますぽだったり、いつもの収集癖で集めてしまった（アリスが言うには）ゴミしかなかったのだ。タイムイングがよかったと思う事にした。丁度増築しようと思ったんだ。とか言い訳して慰める。

家に使う素材はこの森の木を使うことにした。一応近くにいる妖精とかアリスに使用許可を頂いてからだよ？ 敷地内（予定の更地）にある木を出力最低のマスタースパークでひと薙。倒れる方向にも気を使って一気にスパーンと。葉っぱは使わないので集めて焼き芋

作るのに利用した。出来上がったら近場にいる人に配ろう。匂いに釣られてやつてくるだろうし。

倒れた木材を大きさ順、用途別に分けて凹みをつけながら組み立てる。プラモデル感覚で楽しかったりする。失敗したら成長の魔法でちよつと手直し。便利すぎる。

それでもだいたい時間がかかる。今日はここまでにしよう。

ここ寝室でー、ここ浴室でー、ここ魔法店関連でー。間取りを決めるだけでも一日を費やす。でも楽しくて仕方がない。エプロンドレスが汚れるが気にしない、気にならない。終わったあとの洗濯で落とす喜びも増えるというもの。

壁材は木材一択だけどそれだけじゃ寒いし暑い。暖炉周りに木材は絶対有り得ない。そこら辺の材質は萃香に聞くため怖いけど神社に行く。霊夢が昼寝してるタイミングを見計らつて。ついでに作り置きの記事も置いていく。早いうちに謝りたいって思うけど何を謝ればいいんだろう。

萃香に聞いた材料を求めて隙間妖怪に頼んだり、花妖怪に頼んだり、吸血鬼に頼んだり、そのメイドに頼んで分けてもらう。紫はしようがないわねの一言で手伝ってくれた。幽香は露骨に嫌な顔したけど礼儀正しくお願いしたら何もなかった。レミリアは何処で仕入れたのかわからないけど（多分パチュリーからだろう）私の現状を知つてて笑いながら了承してくれた。咲夜も同様に。運んで移動を繰り返して一日が過ぎる。

もらった材料を家にはめ込んでいく。レンガはここ、コンクリはここ、漆喰はここ、そうしてやつと全貌が出来上がる。あ、屋根忘れた。あとで瓦貼らなきゃ。

家具を入れてから扉をはめ込む。足りなければ追加で作ろう。そんなこんなで家ができたとき。

家作りも終わり残る問題は霊夢だ。それを考えるだけで肺の中全部ため息で出るわ。

家作つてたら理由もわかるんじゃないかとか軽く考えてたけどぜ

んぜん思い浮かばない。やっぱこういう時は謝ったうえで理由を聞くべきだよね……はあ。

しばらくお世話になったアリスにダメもとで理由を聞いたけどやっぱり教えてくれなかったよ。

その漆！ 月が綺麗ですね

もしそれで「死んでもいいわ」とか返されても困るけど。個人的には手を伸ばしたら届きそうとか返しそう。無理だつてわかってるけれど。

「で、なんであいつがここにいるの？」

「知らないよ。今朝起きたらここにいてなんか作業手伝ってるんだよ」

「で、師匠も追いつかずに手伝わせてるの？」

「いんや、追いつかそうとしてあんなつてんの。いいように使ったら帰ると思つてやつてるんだつて」

「で、思いのほか善戦して師匠も喜々として手伝わせてるのね」

「そうらしいね」

「あ、ちよつとてる！ どうすんのよ」

「私としては楽できるからなんでもいいよ。鈴仙も手伝うか私と一緒にサボるか選ぶといいよ」

「うー」

後ろ髪を引かれるように会話を一方的に中断され現状を見返す。私の目の前では最近になって「普通」になった白黒が師匠にあれこれ指示されて動き回っている。魔法使いつて器用なのかな？ 所々私よりも上手く動いていて上手く仕事をこなしている。てゐが言うには彼女は朝から居たらしいが、それだつて彼女の動きは洗練されていた。それこそ毎日手伝っている私以上に。それは会話から聞こえる台詞が私の間違いじゃないことを証明していた。

「あら、終わったの？ 凄いのね。ウドンゲよりも早いわ」

「この調査は知り合いの魔法使いに習っただけよ。早くても完成度なら彼女のほうが上だしね」

白黒の調査は私の目から見ても丁寧だつた。私の知る白黒は謙遜なんかしないからやつぱり様子がおかしいと思う。

「つて、ウドンゲじゃないの。見てないで手伝いなさい」

「あ、はい！」

「おはよう。私のことは気にせず普段通りにしてくれて構わないからね」

そんなこと言われても気にしないなんて無理に決まってるじゃないの……。師匠に目配せで意図を図るが「後で」としか返ってこなかった。うう……。今知りたいのに。

「じゃ魔理沙はこれの調薬を頼むわ。ウドンゲも来たしわからないことがあつたら彼女に聞いてね。私はあっちにいるから」

その言葉と共に師匠はすつと襖の奥に消えていった。この状況で私を置いていくとかどういふことですか師匠く！

白黒も困り顔で「足でまといにならないようにするから機嫌治してね」とかこれももう私の知ってる白黒じゃないんですけどどうしろつて言うんですかあ。



霊夢に謝る口実も見つからず何もせず家にいることも出来ず私は出かけることにした。一応霊夢の顔は見るようにしてるし何かあれば駆けつけたりもした。けど謝ったりはできてない。そもそも理由がわからないから。

で、そんな私が何処に出かけたのかといえば永琳のところである。もつと正確に言えば鈴仙に会いに。

ちよろ……。いや優しい彼女ならきつと教えてくれるはず。でもいきなり押しかけても迷惑この上ないので親御さんの了承という名の脅迫紛いの作戦で実行しようと思う。

太陽がまだ顔すら出していない時間に門を叩く。時間的にうるさくならないように軽くね？ 出てきたのは輝夜だった。

「こんな夜更けに来たのが白黒？ まああいつだったたら戸を叩くこともせず襲って来るからおかしいとは思ったけどさ」

「永琳に会いに来たのだけれど……。今大丈夫？」

「体調でも悪い……って訳ではなさそうね。今なら丁度暇してるだろうし問題ないわ。イナバにでも案内させるから付いてって」

「ありがとう。あ、これウチで採れた山菜。よかったら使って」

「気が利くわね。本物？」

「山菜のこと？ 私のこと？」

「わかってるくせにいい。まあいいわ、案内してあげて」

兎に後を任せ彼女は襖の奥に消えていった。後を任された兎に付いていけば永琳がカルテを持って椅子に座っていた。お邪魔しますと声をかければ軽く驚いていた。

「珍しいじゃない。体調不良って訳でもなさそうね……悩み事？」

「医者に用事って訳じゃなく永琳に相談したいことがあってね」

「厄介事？」

「個人的にそう思っていないけれど多分厄介事」

「……いいわ、聞きましょう」

「ありがと。個人的に鈴仙貸してくれば解決しそう」

「話を伺ってから答えるわ。はい、簡潔に」

「紅白が怒っている理由を知りたい」

「貴女のせいね。……なるほどあの子なら時間を割いて教えてくれそうね」

「仕事手伝うから鈴仙と話させてもらえる？」

「いいわよ。天狗が言ってたとおり性格が変わった貴女にならウドンを貸せるわね」

「流石の私でも人を借りたままにしないと思うけどね」

「私に許可をとってるし姫様も玄関口で話してたようだから……本当に性格変わったのね」

「普通だと思っただけ」

「そうね。貴女じゃなかったらすぐに同意できる台詞よ」

「酷いなあ」

「ウドンゲが起きるまで雑用してもらおうわよ」

「普通の魔法使いでもできる調合をお願いします」

「わかってるわよ。数の必要な軟膏辺りを作っというて。材料は其処に

あるだけで作る量もあるだけでいいから」

「出来上がったら？」

「見せに来て。一個だけ作って見せるから覚えてね」

「ありがとう」

その後は丁度知ってる調合で特に難もなく作る事ができた。ただ、任された量が数十で収まらず時間をくってしまったが。そのおかげで暇もなく鈴仙に会えたのだけでも。さてどうやって話を進めようかと思っていると永琳が追加で調薬を私に頼み鈴仙と二人つきりにさせてくれた。その時の「わからないこと」辺りを強調してくれたので笑顔で頷く。流石に起きたら私が居て驚いているのか鈴仙の動きは何処か不自然だった。一応彼女に聞きたいことはあるが自分の目的は後回しにして頼みごとをさくつと終わらせよう。私の知識と食い違いがないか彼女に確認をとりつつ調薬をしていく。よかった、この作り方なら問題なさそうだ。

作り終えた私は折を見て彼女に尋ねた。

「ねえ」

「ん？ って何よ、もう終わって——る！ はやつ」

「ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「……調薬のことなら問題ないわよ」

「相談事なんだけど」

「相談？ 何を？」

「人間関係。私がおこに來たのも貴女に相談したかったから」

「あー、それが理由ね。師匠には？」

「理由までは教えてくれなかった」

「……はあ。いいわよ、乗ってあげる。役に立つかどうかは別にして、ね」

「ありがとう」

そして靈夢のことを話す。今度は簡潔ではなくおかしくなった辺りから私から見た描写だけだけどなるべく詳しく。話し終える前あたりから鈴仙が半目になっていた。

「え、これ私必要？」

「理由を教えて欲しいのだけれど……」

「どうか本当にわかんないの？　そこは変わってなくて安心したけどさあ」

「わかってたら悩まないし家を壊されたりもしないよ……」

「私は紅白本人じゃないし正確な答えになるかもわかんないけどさ。なんていうか困惑とか焼き餅とかそんなじゃない？」

「え？」

「あなたの性格がいきなり変わって、あなたは変わらず付き合ってきて、それでまずは困惑するでしょ？」

「うん？」

「うん？　ってあんた……まあいいわ。で、あんたとしてはお世話になった人達に謝罪紛いの付き合いつてて紅白にはいつも通り付き合った。話を聞く限りでは家を壊されたとき紅白はイライラしてたんでしょ？」

「確実にイライラしてました……」

「なんの相談もなくいきなり知ってる性格が変わったから焼き餅を焼いたんじゃない？　あ、今更だけどこれ私から聞いたって言うの無しね。今度はここが焼け野原になるわ」

「流石の霊夢もそんなことしないよ」

「あなたの家っていう前科があるんですが……」

それは言っちゃおしめえよ！　とか思ったから苦笑いで返す。もしもそうになったら建築するの手伝うよ。私が霊夢にそれを言わなきゃ良いだけだよさ。

「とりあえず私はできたものを師匠に渡しに行ってくるけど……あんたは？　って聞かなくても何をしたらいいかわかってるって顔ね」

「うん、ありがとね。相談に乗ってくれて」

「お礼はいいわよ。だけど紅白には絶対に言うんじゃないわよ？　焼き餅とか関係なく私があんたに助言した事が知られたら怖すぎるわ」
「気をつけるよ。永琳に用事ができたって言つていて」

「行ってらっしゃい。言わなくてもわかってると思うけど訊かれたらそう言つとくわ」

身支度をして早足で歩き出す。場所は博麗神社。なんて謝るかまだ決めてないけど理由もわかったしなんとかなるだろう……きつと多分……。またぶっぱ鈴されたらどうしようとか思っても深く考えない。とりあえず情報提供仙者の名前を出すことは絶対にしないことだけを心がけて向かうのだった。

その捌！ 虹は太陽の反対にしかでない！

つまりは太陽を背にしないと見えないってことよ。鏡で写せば出るかもしれないけどそれは違う気がする。

霊夢に謝りたくって、知り合いに尋ねたら教えてくれなくて、ちよろ……親切な優曇華に聞いたら簡単に教わった。ついでに永琳の調合する薬も軽く教わったし研究のしがいがある。優曇華から聞いた通りだと謝るのも火に油というか、火に小麦粉くらいヤバいんだけど……。取り敢えず言葉にするのは恐いのでちよくちよく通うことにする。私的には通い妻（笑）も悪くはない。相手がぐうたらでなければ尚いいが。

家をぶっ飛ばしたのは霊夢にしてはやり過ぎだと思ったが、照れ隠しと思えば可愛いと思う。（代わりに私にぶつけられても困るが）

その家の再建後にまだ一度も会えていないので早く向かうとする。勿論手土産を持って。お酒とツمامミを献上すれば大抵の怒りは治まるって神奈子様が言ってた。あと諏訪子様。やっべ、あんまり頼りにならないかも……。あそこの神様たちは微妙にずれてるんだよなあ。悪いとは言わないんだけど……相手が霊夢だからミスるとヤバい。

……というか、会いに行くだけで何を警戒してるんだらうか。前は暇があつたら遊びに行つてたというのに。

魔法の森に住む私の朝はそれなりに早い。早すぎると瘴気があつたりして大変なのだ。

お酒のツمامミは三十分もあれば簡単に作れるし、お酒に至っては梅酒を準備した。同じように作れる果実酒も数点。あとはお弁当を作ってお昼くらいに顔をだそう。それくらいなら彼女も暇をしているだろう。

そうだ、アリスも誘おう。緩衝材……というつもりはないけれど張り切りすぎて作りすぎちゃうかもしれないし……や、やめとこう。そ

れは霊夢に相手されるようになってからでいい。

一つ、霊夢と仲良くなるために考えていたものがある。わりと有効だと思っていて、それに頼る上で気落ちしているものが。それはここでは普通の遊びで、人と妖が競いあえるもの。つまりは段幕勝負。建築中にふと、思い出した。けどなるべく頼りたくなかった。だってさ、勝ち負け関係なくても力に頼るのって嫌だし。え？ お前の十八番言ってみろって？ 弾幕はパワー。それは変わらないよ。ただ、せっかく話せるんだからそれを捨てるなんて勿体ない訳ですよ。じゃあ準備するご飯もサンドイッチでいいか。忘れないようにスペカも持って……ハンカチ、ティッシュ、鍵、火種、タオル……このくらいかな？ ルールの方は三枚位にしないと食べ物が悪くなるし、それくらいは霊夢だって譲歩してくれるよね。服も汚れるかもしれないから少し燻んだ物を選ぶ。エプロンなんて灰色に近いし継ぎ接ぎだらけのやつ。見映えは悪いけど貧相には見えないように常日頃から解れないか確認している。糸が解れて引っ掛かりでもしたら大変だからね。用意してから思い出したけどちよくちよく行くつもりなら過剰過ぎただろうか？ 次回からはもう少し軽い用意にしておこうか。さて、心臓がバクつく小心者の私だけどやると決めたらバシツとやろう。仲直りできなくてもいまより関係がよくなれば御の字だ。

その玖！ 私に勇気を分けてくれ！

大切な場所を守るために、背中をおしてくれる、そんな勇気を。

謝ろうと思いい境内に足を運ぶ。震える足が何度も階段を踏み外すが箒に乗る気にもなれない。そもそもなんでこんなに怖がっているのだろうか、あんなに謝りたいと思っていたのに。

いろんな人に訪ねて解き方を教わったのになんで答えがわからなかったらこんなにも辛いのだろう。階段から見える神社はまだ遠い。

私のせいなのはわかっていた。理由ももしかしたらで思っていた。違ったらいいなって思っていた。でも霊夢に迷惑と思われても構ってくれて嬉しかった。

……私は怖かったのだ。頭ごなしに今の私を否定されるのが。彼女のサバサバとした答えが。問題を先送りにして手遅れになってから取り掛かる……なんて酷いやつだ。今ならルーミアに食べられてもいい人間なのかもしれない。なんて思うのは逃げだろう。私はまた逃げるのか。

これが私の『普通』だとは思いたくない。

もし言いたいことも言えずに固まったら彼女はどう反応するだろうか、呆れられる？ 心配してくれる？ 苛つかれる？ なんにせよ、面倒をかけそうだ。

遠い。神社にいく階段ってこんなに長かったつけ……小町に距離を弄られてる……んだったら気が楽なのに。

ぼやける視界に揺れる地面。私はどれだけびびりなのか。

だいぶ前に作ったますぽに手がのびる。持ってきたのは失敗だった。でも、こんなに足が遅くなるなんて思わなかったから……これに頼ったらもう私は『普通』に戻れない。

はあ。と深く息を吐く。肺にたまっている空気を全部吐き出すように。そして一気に吸い込んだ。最後に勢いよく声に出して気を締める。ここで悩んでも進めないから。

最初に二段抜かしで一気に登る。下は向かない、前だけ見つめて足を踏み出す。たんたんたん、と進むにつれて鳥居が見える。もうすぐ会える。言いたいことはまとまってないけどどうにかなる。どうにかする。地味に階段つてハードワークだよ、進む速度が早かったよ。うで心臓がよく跳ねる。でももう少しなんだ。頑張つて。

勢いよく駆け出し、鳥居を抜けたときには肩から息をしていた。膝に手を置き深呼吸。いきなり止まったせいであらうと痛かったけど、うじうじした駄賃だ。快く受け取ろう。

呼吸を戻してさあ、ごたいめ……ん？ ん？ んー？

目の前にあるはずのものを探して視界を動かす。あれ、博麗神社がない？

いや、神社はある。だけど私の知ってる形をしてなくて、神社なのかすら怪しい。これが幻なら、夢ならどんなに良かったらうか。

なぜなら、私の前にはあるはずの神社は大きな石が突き刺さり粉々になっただけだから。

その拾！ 死して屍残すまじ！

疫病的な意味ではそうだけど、個人的には骨くらい残してほしい。

目の前に広がる光景をなんとか飲み込み異変と捉えんとする。わざわざ霊夢に喧嘩を売ると言うことは私の知り合いではないだろう。私の知る妖怪は『普通』ではないが態々住処を奪ったりはしない。相手の前に現れて挑むか、特定の技(?)の範囲の無差別に巻き込むか、だ。

境内から見える範囲内ではこれ以外に大岩はみられない。地面のヒビの入り方からして、尋常じゃない威力で叩き込まれたのだろう。神社の破片は境内だけに収まらないのに大岩の破片がない。十中八九、妖怪の仕業だろう。妖力が解るわけではないのでそこは巫女に任せる。……巫女？ あ、やべ、忘れてた。

「霊夢！ 何処に居るの!! 巻き込まれてなんか居ないわよね?!」

いつ叩き込まれたのかわからない。もしも深夜になれば寝首ドッキリなんてもんじゃない。急を要する。もしかしたら紫が、なんてすがりたくなるが優しくても妖怪なのだ。頼るのはいけない。

「霊夢！」

「なによ、喧しいわ……ね……?」

破片に気を付けながら進もうと足を動かせば、声は後ろから聞こえた。丁度出掛けていたらしい。面倒そうに頭をかきながらこちらをみて固まる霊夢。いや、これは私の後ろのせいだろう。そうして思い出す。あれ、これ、やばいかも。

「あ、あ、ああ、あんた!?!」

「ひゃい!?!」

しどろもどろになるがしようがないじゃん。

「先に家ぶっ飛ばしたのは私だけだこれ、どうしてくれんのよ?!」

「わた、私じゃ、」

「見る影もなくぶっ飛んでるじゃないの?!」

「わたし、」

「しかも見せびらかす様に大きな石！ なんの嫌がらせ？ 私が拜むのは石で十分ってこと？」

謝ろうとしてきたけどこれは違くて。

何をするべきか、なんかもう、どうしていいのかわからくて。

「どんな言い訳を聞かせてくれるのか楽しみね、ほらなにか言いなきいよ」

このままここに居たらどうなるかなんてわかっていたのに。

でも心配になったらそんなことどうでもよくて。

「なによ、今度はだんまり？ 前々から思ってたけどあんたが普通普通言ってる可笑しいわよ」

「え？」

「だって、あの魔理沙よ？ 自己中の権化とも言えるべき魔理沙が普通？ なんの冗談よ。この際言わせて貰うけどあんた、新手の妖怪なんでしょ？」

「ち、ちがつ」

「はっ、どうだか」

ようやく答えが出て舞い上がってたみたい。持ってきたお弁当なんか気が動転してひっくり返ってるし、反論しようにも口が動かないし、視界はぼやけるしで最悪だ。

「だー、かー、らー？ 喋らないとわかんないつつてんのよっ！」

「あ、のね……わた、うう、っ」

「あんた……ちよっ、ま、まちなさい！」

謝らなきやって思ったのに気が付いたら私は走っていた。階段なんて知らない。わりと傾斜も有った気がする。でも止まらなかった。色々痛くて、色々苦しくて、念頭に謝らなきやって思ったけれど今はそうじゃなくて。

霊夢はむちやくちやだけど、正しいと改めて思っちゃった。

やっぱり私はダメなのかなって。

私は『普通』になれないんだ。

わかっていたのに。ね。

もう、ほんと、ダメかもしれない。

その拾壹！ 取捨択一取捨選択四捨五入！

思い付いたこと書いたけど意味わからない。

それほどまでに狼狽えていると言つても過言ではない。霊夢にきつく中られて神社から逃げ出した。家に帰ると言うより宛もなく逃惑った。気がつけば湖にいて、紅魔館も目前に迫っていた。

今の私は手ぶらで、持ってきた物は何処かに忘れた。記憶の片隅にもない。本当に何処にやったのか。……そうか、これが俗に言う、天狗の仕業かつ！ おのれ。……いや、天狗が態々私に嫌がらせするはずないか。もしされてても中身食べてくれるなら嬉しいし、感想を頂けるのなら追加をしてもいいくらいだし。ただ、アリスのように好き嫌いを言わずに頑張つて食べるなんて事をしないでくれるなら尚更いい。

そうだ、気分転換に美鈴と話そう。せつかくここまで来たのだし。空気というか、側に居ると落ち着くのだ。お姉さん気質というか、居心地がいい。多分これは咲夜もわかつてくれると思う。

門に迫ると何故か空気が重い。美鈴は居るには居る。が、いつものニコニコとした顔ではなく、厳つい表情で警戒していた。私が最初に謝りに来たときよりも空気が重い。何かあったらしい。

「……美鈴？」

「おや、魔理沙さん。こんな時に何故此処に？」

「こんな時つてのがよくわからないんだが。……相談というか、愚痴というか、ちよつと話せるか？」

「……だいぶ波長が乱れてますね。貴女は関係無さそうですし構いません。けれど警戒しながらでよろしいですか？ お嬢様方からの頼み事があるので」

「ありがとう。仕事の邪魔しない程度に話すね」

警戒しながら、と言っていたが私の話に終始返事をしてくれて嬉しかった。話した内容は、霊夢に謝りに行ったら怒鳴られて、持ったバスケットを放って、逃げ感ったこと。とても辛かった。けどスツキリした。弾幕勝負よりも肉体言語の雰囲気過ぎて涙目だったこと。
(本当に泣いたけど)

美鈴の側は落ち着くと言ったら暫く居てもいいと了承を得た。とてもありがたかった。彼女が神様なら信仰モリモリだ。それくらいありがたかった。

そして心構えから落ち着けて気付くことがあった。なにかがおかしいのだ。というか、地震は普通に起きることだと思っただが、その頻度だった。

霊夢に会いに行くとき揺れていた気がしたが、揺れる(地震で)だったらしい。物理的に揺れていたのに気づかない私、本当に落ち着けよ。

美鈴が警戒しているのもそのせいだったようだ。霊夢の神社が壊されている事は伝えるので、もうすぐ解決するだろう。謝るのはそれから。今は逃げたい。や、それがダメなのは理解してるけど、反射的に逃げるのだ。喧嘩ダメ絶対。イタイのヤダ絶対。

駄々をこねてたら、美鈴に少し日が下がるまで一緒に居ませんかと誘われた。天使か。

その拾貳！　意思の疎通は用法用量適切に！

過度の摂取は大事に至る訳で。

天使のお誘いに飛び付いた私だが、これが悪魔の頼みだったとしても縋っていたと思う。お前とは遊びだったんだ的な人間きの悪い言葉が過るが、そんな気は一切ない。美鈴天使！

でもそうしていて気づいたことがある。紅魔館が忙しないのだ。妖精メイドが駆け回り、咲夜の声が至るところで響く。その事に居辛そうにすれば美鈴が私を宥める。「魔理沙さん、お茶は如何ですか」「魔理沙さん暑くないですか」「魔理沙さん、パチユリー様が来訪をお待ちでしたよ」と話しかけてくれる。

目を泣き腫らして匿ってくれるとか、これもうどうやってお礼すればいいのかわからない。とりあえず『ますぽ』を渡した。笑顔をくれた。私は暖かくなった！　お礼したのに御礼される。あばばば。

「美鈴、お嬢様が——あら、魔理沙じゃないの」

「ぞあくうやあ」

「ちよっ、どうしたの、め、美鈴、説明してちょうだい」

ハンカチを鼻に押さえてくれて無色の感謝を流すことなく塞き止める。端から見たら幼児をあやす現場そのままのだけれどね。鼻声でありがとうと告げてごしごし擦る。

「霊夢さんのところで一悶着あったそうです。魔理沙さんを見たら理由はわかりましたけど」

「あー…。あの子本当に素直じゃないわね。トゲったらしいったらありやしないわ」

「うー…」

「あ、ち、違うのよ。別に悪口じゃないの、唸るのはやめてったら」「お嬢様にお伝えしてください。私は門番をしつつ魔理沙さんとお話致しますので」

「……そうね。急ぎではないから魔理沙を頼むわ。お客様をもてなすのもお仕事ですもの」

咲夜はぼつが悪そうに顔をしかめて瞬く間に消えた。忙しいのに申し訳ない。美鈴はお気になさらず。とにこにこしてた。無理です、申し訳ないです。本当に。

「そうだ、魔理沙さん、宜しければお泊まりしてくださいな。パチュリー様も妹様も喜びます」

あ、これ拒否権ないやつだ。そう思うが泣き顔腫らして抵抗すれば重ねて迷惑なので頷く。

「勿論、落ち着いてからですよ。具体的には咲夜さんがもう一度来てからにしましょう」

「咲夜が？」

「お泊まりする場所を片付けるからです。今日の魔理沙さんは大事な客人ですからね。私も許可を戴いて参加させていただきます」

「そんな、わざわざ悪いよ」

「まあまあ、そう言わずに」

あれよこれよと饗されてキリキリ胃が痛む。辞めて！もう私のライフはゼロよ！とか頭の片隅で描くが私の行動は全て阻止される。魔王からは逃げられない状態である。

諦めた私はこう思うのだ。もうどうにでもなれ。と。

その拾参！ シリアスっぽいけどシリアル

——あー、またやってしまった。

謎はあれ犯人ではないのはわかっている。わかりきっている。ただ、そうただ単に関わってほしくなかった。嫌な意味に聴こえるかもしれないが間違いを正すのも無理なくらい辛く当たった。異変が相手なら現状の魔理沙は邪魔なだけだ。説明がめんどくさくなったのも理由のひとつだが。

——泣いてたわよね？

荷物だって置き忘れてる。バスケットに付いた汚れを落とそうと拾えば鍵やら食べ物も出てくる。込み上げる罪悪感で胸が潰れそうだった。すれ違って痛む傷より深い痛みだ。全部が全部あの子のせいでできないのは明白である。性格が柔らかくなっただけ、前より悪くならず済んだことを喜べばよかったんだ。こんな苦しい状態で異変解決に向かえば途中で崩れそうだ。気付かずバスケットを握り締めて奥に入った物が見えた。そこにあっただのはスペルカード。何てことだ、今襲われでもしたらー！ ……行ってどうなる。こうなったのは自分のせいだ。そう考え立ち止まった。立ち止まってしまった。

——最悪だ。

身勝手にあたって身勝手に心配し、身勝手にも躊躇した。あの子だって変わろうとしていた。変わったことに距離を測りかねて戸惑っていた。理不尽に立ち向かおうとしていた。鈍感さは変わらず訊ねていたのも耳にした。今日、ここに来たということは確かに変わろうとしたんだ。それを……っ。

「白黒なら吸血鬼のところよ」

「んなっ!? 紫あんた今なんて」

「湿っぽい霊夢なんて意外すぎて思わず声をかけてしまったわ。でもまあその考え方は大事よねえ。……今のあの子に死なれたら私も後味が悪いし少しだけ助けただけの事」

「あんた何か知ってるの?」

「さてどうかしら——と言いたいところだけど今回は本当に知らないのよね。知らぬ間にやったのかと思つて焦つたのだけれど……そも利点も無しにそんなことしないわよ。動揺で結界もぐちやぐちやになるわ」

「……はあ。今回はその情報だけでもお釣りが来たわ。聞きたいことは聞けなかつたけど」

「そりゃあねえ。——今のところは彼女に別状はないわ。彼女自身がここに戻ろうとしない限りね。だからやることは一つよ霊夢」

「なら犯人を見つけて神社をもとに戻すだけね」

「その通り」

知ってる岩に関する能力者は一人だけどあれはそんな陰険じゃないしとなるとなんだ? 純粹に上から落としたのか? 上……上ねえ。んー。……うえ?

「ねえ紫」

「なあに霊夢」

「この上つて何かあるの?」

「……んうー? ああ! あるわよ。雲まで進めばね」

「なるほど。取り敢えずとつちめてくるわ」

「私は?」

「——もしも、ないだろうけどあの子が来たたら伝えといてくれればいいわ。来なければそれでいいし。じゃ、頼んだ」

返答は聞かずに飛ぶ。目指すは雲の奥にいる犯人（仮）まで。
腹の虫が悪いので適当に罪状が増えるだろうけど間の悪い相手が
悪い。

誰かの日記

最近忘れっぽいので、というか覚える物事が増えたので日記とかメモ帳にあったことを記入しようと思う。誰かに見られることはないだろうが、もしもそうなれば恥ずかしいので生活には一切触れないよう書こう。

春、曇りの日。

パチュリリーの蔵書から気になる書物を見つけた。ページを捲る毎に魔力を出して危険な本だ。

即、借り出して写本したが、写本にも能力が載る。写本ページを置き換えて対処。見られても魔力を溢れないようにした。原本は危険なので仕舞っておく。

読んでいくと精霊降臨の書物ということがわかった。お手伝いに欲しいところだったのでこの研究を進めてみよう。

春、雨の日。

必要な材料が多すぎる。実行に移せるかわからない程度には。『おなまずのひげ』とかどの辺りからおおなまずなのかさっぱりである。『大樹の桜の木の根』もサイズ不明。前途多難だ。補足に花をつけないものほど好ましいとあるが枯れた木と何が違うのか。しかも桜。さっぱりである。『大船の破片』とか大雑把だし、死神印の舟は小舟だし、前途多難すぎる。さっぱりだ。書き直してもさっぱりだ。

春、曇りの日

さっぱり尽くしなので開き直って見つけたら採集の形に変えることにする。研究するに至って面倒だが、蒐集が困難なのだからしょうがない。

気分転換に写本を読み耽っていると気になる文面を見つけた。『各

所の大まかな位置』それを省み文章を漁る。木の根は冥土、舟は空、までは読み取れる。面倒なことこの上ない。『異変の際に隣接』……は？ ちよつと詳しく見てみようか。

『異変の際に隣接』

これらの素材は通常とは逸脱した存在である。鯰の地割れ、大樹の満開桜、空舟の闊歩、どれをとつても特別な力が宿る。その際に起こる力場を利用した召喚の儀式である。通常時のそれらは異様な雰囲気纏うだけのただの物体だ。それを用意しても無駄になる。

まるで現実にかき起るかの様に書かれたそれを読み解く。もしもそんなことが起きれば、もしもその事態に私が直面したら、この書物を知った私は普通に驚くことはないだろう。識ってしまったから。仮定がどうあれ。

知的好奇心で調べたのが悔やまれた。この精霊は触れてはいけない。だが――。

夏、晴天の日。

だいぶ時期が開いた。本の処分に困ったがなんとか元に戻すことに成功した。写本には鍵をつけた。封印と共に。解く方法は――。……書く必要ないか。

夏、雨の日。

写本の封印が無理矢理開けられていた。勿論、その中身も。鍵は無惨に壊されていた。まずい。

夏、雨の日。

手当たり次第に問い詰める。

不明、不明。

興味本意だったことは大いにある。が、そのツケがシワを寄せるかの如く一気に来た。事の大きさは曖昧ながらも理解している。も

はや、誰かに相談する度合いを通り越している。この日記は誰の目にも入らないように近いうちに破壊する。関係がないと割りきれられるほど時間もない。

ツケの払方は儀式を以て行われるそうだ。その後の私の処分は儀式が成功なら解放、失敗なら保管だそうだ。怖い、堪らなく怖い、怖いぜ……。

もし許されるなら、今までに借りた本を返して、彼女たちと友達になつて、いままでに起きた異変のことを話ながら花見酒でも楽しみたいものだ。霊夢、私はお前のこと——

その拾肆！ 皆で渡れば恐くない！

ただし三途の川。

そんな意気込みで渡るものでもないし、どちらかと言えば運んで貰うものだけだね。寝てばかりの彼女の仕事を奪うのも悪いし。魂とはいえ定員だつてありそう。

ふとどうでも良いことを考えられる程度には落ち着けたのだと切り替えたが目前に殊更わからないことが増えたから現実逃避をしただけだと気付いた。もう一度現実から目を背けたいので考えを深めようとするが、逃避して見ていなかったものを再発見して、それをまた意識から逃すことは難しかった。

天使美鈴が城主からのお呼び出しで手持ち無沙汰になった私だったが、咲夜とパチュリーのお誘いで図書館に行くこととなり魔法談議をしていたら、フランが私を見つけてさあ大変。天使美鈴も戻ってきてくれたけど少しだけ遅かった。

予てよりフランは私に何かしたいと思つて居たようで、何故か私を椅子に縛るといふ暴挙に出た後、何故か私以外にもついででそれを提供しようといふ画策していたらしく、今がそのときだった。

私の目前で繰り広げられるのは平常運転は氣を失つた状態の咲夜、口か女性として数に入れて溢れ良いのかわからない状態のパチュリー、敢えて寝ている心の御姉様の門番、頭を床に埋めている館の主、それらをこれらを作り上げた元凶見て笑つているのフラン、そして縛られた私である。そりや、現実逃避したくなるわ。

文字数稼ぎしたいところなので現状をもう少しだけ説明しよう。これはフランが暇をもて余して料理を作ったことが現況である。私が縛られたのは逃げられる口実しかないから。弱みや恥は見せたが、地雷を踏み抜くほどの恩はない。薄情だけどこれは無理である。が吸血鬼に捕まったら逃げられんて。

誰か助けてください。いま、残機が全部溶けそうな事件が起きそうな……。

「ねえ、まーりさー?」

「な、何かなフラン」

「まりさはさー、食べてくれるよねえ?」

「な、なにをかね。そ、そもそも私はちよつとお腹が痛くてね、お花を摘みに行きたいんだよ。だ、だからこの縄ほどいてくれないかなあ……なんて」

私が今までやった実験でもここまで目に悪い色は起きたことなかったし、そもそも咲夜が言うには食べれるものしか使っていないときた。誰が信じるかその台詞。何も加熱してないのに未だにごぼごぼ煮込まれてる劇物を食べるとこの吸血鬼は申してるんだぜ、まさしく鬼である。逃げ場もない現状、覚悟決まった? 決まるわけないだろう! じゃあどうする? 人間がこの場を待ち受ける未来を沿うしかできないなら、私らしく私ができる私なりの職業で逃げるしかないだろう。縛られていようが、視覚が使えなからうが、口が塞がれていようが、思考できるのなら魔法を使えばいい。魔法ってべんりー! なんて思いたい失敗≠死である。力むのは仕方ない。震えもする。メタな事だがギャグ補正で死にはしないだろうが自分を犠牲にするのは違う。見るのは楽しいがね。誰か代わってくれる奴はいないものか。あ、そもそも好感度的なものがないと呼ばれませんでしたね。フランなりの感謝の気持ちでしたね。魔法で逃げるとか出来ませんわ。死にたくないけど一応純粋な感謝の気持ちだからこれ。あーこれで死んでも誰も恨んでくれるなよ、善意だから悪夢なんだよ、無理だよ、模範解答寄せたってんだ……。いや、逃げ場の無い状態でこれだけよく持たせたつてもんだよ、獲物の前で舌舐りしてるだけだし保つのは当たり前とも言えるけど。こんな話、閻魔様だって笑ってしまっいそうだよ、そのまま笑い話の臨死体験って事で戻してくれないかなあ……。なんて。あ、ダメ、そうですか、そうですよね。やだ、泣き

そう。もう泣いたあとだからそのリビドー（誤用）すぐ溢れ出すぞ。

「じゃあ、頂きますだよ？」

「無理！ 無理だから！ やだ、やめてえ！」

「わー、かわいいー」

「おい、何で顔赤らめてんの?! 縛られている上に馬乗りとかっちよつちかつ、ぐああああ」

起きたら自分の家のベッドの上でした。落ちる前の記憶はないけど隙間が見えた気もするので彼女が助けてくれたのだと思いたいです。目覚めてから心臓バツバクで考えまとまらないけど、助かったのだろうか。

少しだけ落ち着いたので現状を思い返してみる。確か……なんか今異変起きてたっけ。であー、霊夢に……。どうしよう、かなあ……。私って何なんだろう。普通の魔法使いな筈なんだけど。そも、前の私って迷惑の権化だったと思うんだけど、何時からこう、なったんだっ——

——せつかく望みを叶えたのに戻りたいの？——

起きたら自宅のベッドの上でした。なんか既視感感じるけど何があつたっけ？ なんか目元痒いんだけど。あつれ？

記憶がぼんやりで靄がかかっている？ 何だろう、何かあつたような無かったような。でも思い出そうとすると眠い……。？ なんて……。？

どうにかこうにかぼやける視界で立ち上がり意識を飛ばさないよ

うに奮い立たせる。生まれたての子鹿のように震えてるけどそういう意味じゃないよ。

窓から空を見れば快晴で、博麗神社の方面の、そのまた上空のほうが見覚えのあるスペカで輝いていた。おー……。私がそれを認識したのと同時くらいかな？ 後ろで空間が開く音。おや？ 振り返るとそこに居たのは隙間妖怪の彼女。私を見るや否や目を見開く。なんでせうかその反応。

「大丈夫？」

「あ？」

「今、貴女、ぶれてるわよ？」

ぶれてる？ 震えてるのは自覚してたけど振動してんの？ しんどいのはそういうわけ？ 重い体に鞭打つように自分を見回す。服越しだとわからないから手を見たら指が十本あった。あ、これあかんやつですわ。

視界がぼやけてるのを抜きにしてもぶれた指の幅が刻々と増えていく。つまりこれは離れている？ 自分のことなのに他人事のように思う。所謂魔法使い思考ってやつ？ 二つに別れそう。何がどうとは言えないけど取り敢えず一言、ちゃんと音に出たかわからないけど溢そう。

ごめん、って、霊夢に言いたかったな、なんて――。